近代英語協会第 32 回大会

―― シンポジウム・研究発表・講演―

日時：2015 年 6 月 27 日（土）
会場：愛知学院大学 日進キャンパス 12 号館 1 階 G106 教室
愛知県日進市岩崎町阿良池 12
℡ 0561-73-1111

近代英語協会事務局
〒156-8550 東京都世田谷区桜上水３−２５−４０
日本大学文理学部英文学科　保坂道雄研究室内
メールアドレス：hosaka@chs.nihon-u.ac.jp
協会ホームページ: www.modernenglish.jp
(電話: 03-5317-9709　会費振込口座 00810-9-5821)

■ 開会の辞　　9:50－10:00　　会長 立正大学教授 児馬 修

■ シンポジウム　10:00－12:00

「後期近代英語における副詞の諸相」

司会： 中 村 不二夫　(愛知県立大学教授)
講師： 中 村 不二夫　(愛知県立大学教授)
講師： 鈴 木 大 介　(日本学術振興会特別研究員 PD)
講師： 水 野 和 穂　(広島修道大学教授)

シンポジウム趣意書

愛知県立大学教授 中村不二夫

後期近代英語は、現代とほとんど違いがないという誤解からかつては軽んじられていたが、1980年頃から研究の必要性が認識され始め、今日を迎えている。今年のシンポジウムでは、時期として近代英語、特に後期近代英語を、文法範疇として副詞を、取り上げた。また、それぞれの研究課題を持つ各講師が限られた期間の中で発表準備を行わなければならないため、無理に特定の副詞や用法に共通項を絞り込むことはせず、三者三様の副詞に焦点を当て、独自のアプローチから引き出された学術成果の一端を披露していただくこととした。

3 人の講師は、それぞれ歴史意味論／歴史語用論／歴史統語論研究を旨としている。鈴木講師は、本協会のみならず国外の国際会議でも積極的に発表している気鋭の若手研究者、水野講師は 2005年から 4 年間本協会編集委員(長)をお務めになった方で、私を含め、全員が本協会を愛して止まない会員である。皆様に学問的刺激を受けていただけるよう、最善を尽くして発表に臨む。

「動詞に前置される否定副詞 not の歴史」

愛知県立大学教授　中村不二夫

私の担当は、5 段階発達に位置づけられていない *I not say* 型否定平叙文と、*Not say* 型否定命令文の近代英語における様子を管見することにある。*I not say* 型否定平叙文は、「優雅さを添える許される過ち」(Puttenham ?1569/?c1585/?1589) であり、「16 世紀韻文に極めてよくある語順」(Partridge 1953 [1948]) で、「1700 年を過ぎると消滅し、Visser の時代の英語では主に詩に限られる」(Visser 1969) と言われている。しかし、*I not say* / *Not say* 型は、*I do not say* / *I don't say* / *I say not*; *Do not say* / *Don't say* / *Say not* 型に比べると日陰の形式ではあったが、書き物の種類・地域・教育の程度に制限なく、後期近代英語でも根強く残存していた。この 1 点のみに絞り、129 冊の日記･書簡史料、ICAME[2] の中の 8 つの電子コーパス、ARCHER 3.1、インターネット上で欧米の大学から無料開放されていた電子コーパス 145 点からの調査結果を示し、発達に関する Lowth (1762) から Rissanen (1999) に至る 11 人の学説を検証する。

「法副詞の拡散/収束と歴史語用論―実際の語法と文法研究―」

日本学術振興会特別研究員 PD（龍谷大学）鈴木大介

現代英語において、蓋然性（可能性）の低い意味を表すのは主に *maybe*, *perhaps*, *possibly* のような法副詞だが、英語の歴史を紐解くと、それ以外にも *belike*, *haply*, *mayhap*, *peradventure*, *percase*, *perchance* など様々な表現が用いられていたことがわかる。本発表は、それらの法副詞が現代に至るまで、いかにして拡散、あるいは収束してきたのかを実証的に示すことを目的としている。さらに、初期近代英語期以降に多様化したと言われる法副詞が、後期近代英語期においてどのような発達を遂げたのかを明らかにすることも目指す（cf. Nevalainen 1994）。方法としては、*OED* の引用文や様々な電子コーパスを中心としたデータを基に分析を行う。併せて、法副詞と語用論的変数との関係に着目し、文の種類、生起位置、主語の定性、法助動詞との共起といった言語項目を調査する。そこから後期近代英語期における語用論的機能の付与と拡大を示しつつ、実際の語法について具体的な考察を加えたい。

「後期近代英語における単純形強意副詞と*-ly* 形強意副詞について」

広島修道大学教授　水野和穂

後期近代英語は、一見すると現代英語と大差がない印象を与えるが、細部においては相違点が多々見受けられる。本シンポジウムでは、(a) …it blowing at this time ***excessive*** hard with heavy Squalls attended with rain…. (Cook 1768-71) / (b) …as the nights were ***excessively*** cold, I was fain to wrap myself up in flannel…. (Smollett 1751) のように 17-18 世紀に強意語として頻繁に使用された単純形副詞と、それに取って代わる *-ly* 形副詞に焦点を当て、英語の標準化の一端を提示するとともに、その変化のメカニズムについて考察する。具体的には、当時の規範文法家がそれぞれの単純形を “improper”, “absurd” あるいは “vulgar” として指摘した *exceeding*(*ly*), *excellent*(*ly*), *extreme*(*ly*), *full*(*y*) 等について、その使用状況を複数のコーパス（ARCHER, CLMET, PPCHE を予定）から得られたデータをもとに検証を試みる。

■ 招待講演　13:30－14:30

司 会　東京女子大学教授 小倉 美知子

“Revisiting EVERY and EACH from Old to Early Modern English”

Leena Kahlas-Tarkka (University of Helsinki)

The paper aims at mapping the diachronic development of the ‘universal quantifiers’ or ‘distributive determinatives’ *every* and *each* in English. Earlier studies have viewed their development in different periods of time and in different functions, but by revisiting the topic the author hopes to provide a synthesis of the processes that these quantifiers have undergone from Old English up to the Early Modern period. Attention will be paid to their form, syntactic behavior, semantic aspects, dialectal distribution and text-type-related issues. All in all, the survey shows a simplification process from a great variety of lexemes (*ælc*, *æghwilc*, *gehwa,* etc.), spelling forms (*ech*, *uch*, *elch*, *ych*, etc.) and collocational structures to a more specialized and regulated syntactic behaviour of *every* and *each*, as seen in the Present-day English usage.

The data, some 3000 examples in all, are retrieved from the diachronic part of the *Helsinki Corpus of English Texts* and thus cover a period of a thousand years from the earliest Old English texts to the early 18th century. The corpus provides a relatively balanced set of data, due to the principles adopted for the compilation of the material, and thus serves well the purposes of an overview.

■ 研究発表　14:40－16:40

司 会　中部大学准教授 柳 朋宏

1.「英語史における名詞前位修飾の非対格過去分詞の出現について」

名古屋大学大学院　Bai Chigchi（バイ チゴチ）

英語史において、名詞前位修飾の非対格過去分詞(e.g. the fallen leaves)は初期近代英語に出現した。本発表では、名詞前位修飾の過去分詞に課される制約が、「基底動詞が他動詞でなければならない」から「基底動詞が名詞に主題役割 THEME を付与しなければならない」に変わったことにより、この構造が出現したと主張する。この制約の変化の引き金となったのは、後期中英語から初期近代英語にかけて多くの能格動詞が導入されたことである。すなわち、能格動詞は他動詞性を持つが THEME を付与するため、その過去分詞が名詞を前位修飾するようになると、前者の制約が後者の制約に取って代わられることになる。その帰結として、能格動詞と同様に THEME を付与する非対格動詞の過去分詞が、名詞を前位修飾することが可能になったのである。

司 会　倉敷芸術科学大学准教授 大野英志

2.「人称用法と非人称用法の think の通時的変化」

日本大学非常勤講師 齊藤雄介

現代英語の think は、古英語の þencan (think)と þyncan (seem)を起源として発達してきた。初期中英語において、それぞれが þenken 及び þinken と綴られるようになり、この時点ではまだ意味及び用法が区別されていたが、13 世紀以降、綴り及び意味が似ていることから両者が混同され、後期中英語から初期近代英語にかけて非人称用法が衰退し、意味及び用法が現代英語の think に近いものとなったとされている。

本発表では、古英語期の þencan と þyncan の間に、既に生じていた形態的、意味的、統語的曖昧性と、中英語期に Old Norse より借入されてきた seem との競合関係に着目し、think の非人称用法が如何にして衰退したかを、YCOE、PPCME2、PPCEME の各コーパスを用いて、検討する。

司 会　成蹊大学教授 田辺春美

3.「シェイクスピア作品における人を先行詞とする which について」

大東文化大学准教授 佐藤桐子

初期近代英語では、関係代名詞 which が、先行詞が人である場合に使用可能であったことはよく知られている。この用法はシェイクスピア作品にも頻繁に現れるが、シェイクスピアが who と which を区別せずに使っていたのか、それとも何らかの区別があったのか、という点についてはこれまで本格的な調査はされていない。Matti Rissanen (1999: 294)は、which が廃れて who が発達したことに関して、“this development is in accordance … with the polite and formal expressions of Tudor and Stuart society, which probably emphasised the observation of the ‘personality’ of the referent”と述べている。即ち丁寧な表現や文語体で who が好まれたことがその増加の一因であると考えられている。

本発表では、シェイクスピア作品では、先行詞の種類は who と which の選択にある程度影響しているが、関係代名詞の機能はほとんど影響を与えていないことを確認する。その上で、2、3 作品を取り上げて、丁寧さという観点から登場人物の who (及び whom) と which の使用を検討し、which がより口語的な表現として使われていることを明らかにする。

■ 特別講演　16:50－17:50

司 会　青山学院大学名誉教授 秋元実治

「ロッテのチョコはほんとうに溶かしにくいか―tough 構文の歴史・理論・習得について」

津田塾大学名誉教授 千葉修司

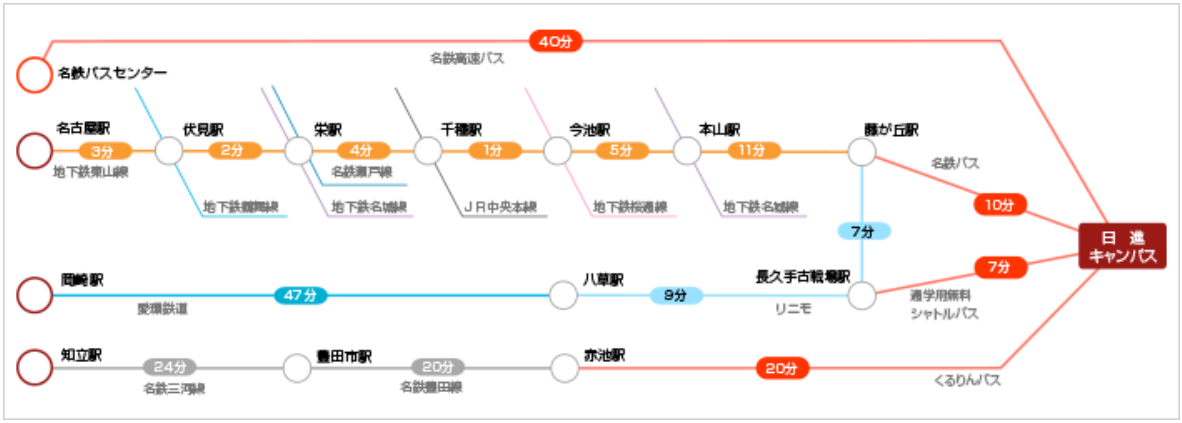
欽定訳聖書に用いられている tough 構文の用法を調べてみると、該当する章句を５つ見出すことができるが、いずれも不定詞の部分が受身構文になっているのが分かる。現代英語では不自然（あるいは非文）とされるこの種の文は、英語史の上でいつ頃登場し、またいつ頃消えていったのか。tough 構文一般についての歴史的変化の跡をたどってみたい。tough 構文の文は表面的には単純な姿をしているように見えるが、実際には、第一・第二言語習得の際に、言語習得者がこの構文を誤って理解している段階があることが知られている。チョコレートの外箱に印刷された英文 "Lotte's Four Season is very hard to melt. It does not melt in your hands for 365 days." は、tough 構文の言語習得研究にとって貴重なデータとなる。いっぽう、文法理論研究の上でも、tough 構文はいろいろとやっかいな問題を秘めていることが分かる。クリントン政権時代に起きた「tough 構文を巡る政治的スキャンダル」の裏話も交え、tough 構文の歴史・理論・習得について考えてみたい。

■ 閉会の辞　17:55－18:00　愛知学院大学教授 前田 満

〈事務局より〉

・当日は学食が休業のため、昼食をご持参することをお勧め致します。
・藤が丘 ⇔ 愛知学院大学前のバス
　藤が丘発 9 時台：9:01/13/25/40/55
　愛知学院大学前発 18 時～20 時台：18:10/30/50, 19:10/30/50, 20:10
　なお、最新の情報は、http://www.agu.ac.jp/bus にてご確認下さい。

日進キャンパスへのアクセス



キャンパスマップ